

# 「動物譜 (Bestiary)」というテキスト

—— ピーターバラ本を中心に ——

## 水 島 ヒ ロ ミ

Bestiary と呼ばれる写本群がある。「動物寓話集」、  
「動物譚」という言い方もあるが、ここではあえて「動物  
物譜」という訳語に従う。擬人化された動物が登場する  
「イソップ寓話集」や「狐物語」とは切り離して考  
えたいからである。

12-13世紀のイングランドを中心に多数作られたこの  
写本群には、定本と呼ばれるものがない。過去の様々  
なテキストからの引用を組み合わせ、変更を加え、お  
そらく加筆し、作られていったのが個々の写本である。  
取り扱っている動物等の項目自体が写本ごとに微妙に  
異なっており、それぞれの写本は異なった内容をもつ  
が、各項目ごとにその動物の習性、特徴を述べている  
点では共通している。そしてさらにそのうちのあるも  
のについてはキリスト教的解釈が加わっている。項目  
で取り上げられているものは、実在の生き物に限らな  
い。ドラゴンやユニコーンも含まれている。

「動物譜」については様々なところで言及されてお  
り、Bestiary という言葉がこのような中世の写本群と  
は切り離されて使われることもある。また、一般的な  
言及にとどまることが多いのは、このような、全体を  
一言では説明しにくい形で残されていることに一因が  
あるのだろう。従ってその挿絵や彩飾について考える  
前に、「動物譜」というテキスト自体について知る必要  
があった。そこで本稿では、具体的な例を示し、その  
内容の一端を明らかにするべく、主にゾウとアリの2  
項目のテキストについて見ていくことにする。テキス  
トとしては「ピーターバラ本 Cambridge, Corpus Christi  
College MS 53」のテキストを扱う。<sup>(1)</sup> この写本の制作  
年代は「動物譜」写本群の最盛期を過ぎた1300-20年頃  
と考えられている。

### I (1) ゾウ (Elephas) についてのテキスト

ゾウについては次のように述べられている。<sup>(2)</sup>

「ゾウと呼ばれる動物がいる。交尾をしたがらない。  
ギリシア人はその身体の大きさから elephantus と名付  
けられたと信じている、山のような姿をしているから  
である。ギリシアでは山は eliphio と呼ばれている。し  
かしインドではその声から barro と呼ばれている、その  
声は雄叫びであり、その歯は象牙である。さらにその  
鼻は promuscida と呼ばれる、それによってえさを口に  
運び、ヘビに似ており、牙で守られている。これより  
大きい動物はいないだろう。たとえばペルシア人やイ  
ンド人はゾウの上の木製のやぐらに配置されると、城  
壁からのように、そこから投げ槍で戦う。彼らは知性  
と偉大な記憶力で繁栄する。群れで移動する。ネズミ  
から逃げる。後ろ向きに交尾する。彼らは2年間妊娠  
している。一度しか出産せず、多くではなくただ一頭  
だけ子を生む。そして300年間生きる。子供を作りた  
くなるとパラダイスに近い東の方角へ赴き、そしてマ  
ンドラゴラと呼ばれる木のあるところへ雌のゾウと一  
緒に行き、雌は先に木から(実を)とり、雄に与える。  
それを雄が食べている間に雌は誘惑し、直ちに子をや  
どす。産み時が近づくと、池に入る、池の水が母親の  
乳房にくるところまで。雄のゾウはお産の間見張っ  
ている、ドラゴンはゾウの敵だから。もしゾウがヘビを  
見つけたら、死ぬまで踏みつけて殺す。さらにゾウは  
雄牛に恐怖し、ネズミを恐れている。ゾウは一度倒れ  
ると起き上がることができないが、これはゾウの性質  
である。しかも眠るときに木に寄りかかかって倒れ  
てしまう。というのも膝の関節をもたないからである。

狩人はそこで木に切り込みをいれる、ゾウがそれに寄りかかったとたん木とともに倒れるように。倒れながら泣き叫んでいると、大きなゾウが現れるが、起き上がらせることはできず、両方のゾウが泣き叫ぶと12頭のゾウが来る、しかし倒れたゾウを起こすことはできない。結局すべてのゾウが鳴くと、すぐさま小さなゾウが来て、鼻ごと口を押し込んで、倒れたゾウを起こしてしまう。さらに小さなゾウはこんな性質もっている、その髪の毛と骨で火を起こすと、いかなる悪しきことにもドラゴンによっても損なわれることはない」。

こうした記述の根底にあるのは、人間を取り巻く自然へ向かう探求心ではなく、人間の想像力につながる、自然に対する関心である。テキストではさらにこの後キリスト教的な解釈が続くが、「ピーターバラ本」の場合、記述が解釈に移る箇所には、欄外余白にSpiritualiter [霊的には] の文字が示されている。

「大きなゾウとその雌はアダムとエヴァを表している。というのは彼ら自身の罪を犯す以前、神を喜ばせていた時、彼らは交接することも知らなければ、罪の知識もなかったのである。妻が木から実をとって食べると、直ちに知恵の木の実を彼女の夫にわたす。すると妊娠し、その結果パラダイスから出ていくことになった。パラダイスにいた間アダムは彼女を知ることにはなかった。つまりこのように記されている、アダムはその妻を知り、みごもった、そして彼女は汚れた水の上でカインを産んだ。このことについて預言者は『主よ、わたしを救ってください。わたしの魂にまで水が迫ってきているのです』という。<sup>(3)</sup> ドラゴンは彼らをおとしめ、神の聖所から追い払わせた。これは神にとって喜ばしくない。大きなゾウが来た。これは律法であり、起き上がらせることはできなかった。盗賊の手中におちた人を祭司たちが救うことがなかったように。また12頭のゾウも彼を起こすことはできなかった。彼らは預言者の一団であり、上述の傷ついた人を救わなかったレビ人のように。しかしかしこいゾウ、

それは私たちの主イエス・キリストであり、彼は誰よりも偉大でありながら、すべてのもののちいさきものとされた。彼は死に至るまで身をおとし、それによって人々は高められ、かしこいサマリア人がロバに乗せたように、傷ついたその人が私たちの弱い心を持ち去り、私たちの罪を担ったのである。さらにサマリア人は保護者とみなされている。彼についてはダヴィデがこう述べている、『ちいさきものたちを守って下さる主は』、それは主がそこにおられるからであり、悪魔は近づくことができない」。<sup>(4)</sup>

ここではまず、ゾウの習性に原罪の寓意を重ね、聖書からの引用によってそれを補強した記述になっている。さらにルカ福音書の善きサマリア人の譬えを使って旧約の律法、12使徒、キリストの贖罪に言及している。

これに続くゾウについての項目の最後は、またゾウの習性についての記述に戻っている。

「まさにゾウはその鼻で巻き取ったものを押しつぶす。足の下に踏みつけた物はこなごなにする。あたかも巨大な瓦礫が落ちてきて押し殺すかのように。彼らは雌をめぐって争わない。彼らは姦淫を知らないのである。彼らには慈悲深い徳がそなわっている。事実、もし、荒野をさまよっている人を見かけたら彼らの知っている道に導くだろうし、ひとかたまりになった家畜の群れに出会えば、彼らはその旅を愉快で静かなものになるようにするだろうから、鼻（または足？）が近くのを殺すこともない。もしたまたま戦闘で攻撃されることがあれば、死傷者を少なからず気遣い、そして疲れ、傷ついたものは群れの真ん中に隠す」。

## (2) 典拠について

一般にBestiaryのテキストが『フィシオログス』（原典はおよそ2世紀ごろギリシア語で書かれ、中世ヨーロッパには4世紀後半のラテン語訳が流布）とセヴィリアのイシドルスの『語源』（7世紀）からの抜粋を中

心にして構成され、これにプリニウスやソリヌス(3世紀)、聖アンブロシウスの『ヘクサエメロン』(380年ごろ)などからの引用が加わっていることはよく知られている。<sup>(5)</sup>しかし、同一の項目であっても、典拠となったテキストの扱いは写本ごとに、また同一写本でも項目ごとに異なっている。かつて Bestiary のテキストが4グループに分類される際に着目されたのがこのような相違であり、『フィシオログス』と『語源』からのテキストの扱いが決め手となった。<sup>(6)</sup>

項目の順序が『フィシオログス』に準じており、項目ごとでは『フィシオログス』に基づくテキストの前か後に『語源』からの抜粋が続き、『フィシオログス』にはない項目つまり『語源』からの項目の抜粋が『フィシオログス』の項目の後ろにまとめておかれているというのが第一グループである。第2グループは『語源』からの抜粋が項目の途中の記述に混ざっており、四足獣、鳥、爬虫類、魚の順で項目がならんでいる。『語源』における項目の配列は四足獣、爬虫類、魚、鳥の順であり、順序が入れ替わってはいるが、「分類する」という『語源』の考え方を踏襲している。「ピーターバラ本」のテキストはこの第2グループに分類されているので、先ほどのゾウの項目に戻ってこのことを確認しよう。

『フィシオログス』と内容的に重複する箇所はそのままで、『語源』からの抜粋は下線で示す。また、『ヘクサエメロン』からの引用と思われる箇所は点線で示す。<sup>(7)</sup>

「ゾウと呼ばれる動物がいる。交尾をしたがらない。ギリシア人はその身体の大きさから elephantus と名付けられたと信じている、山のような姿をしているからである。ギリシアでは山は eliphio と呼ばれている。しかしインドではその声から barro と呼ばれている、その声は雄叫びであり、その歯は象牙である。さらにその鼻は promuscida と呼ばれる、それによってえさを口に運び、ヘビに似ており、牙で守られている。これより大きい動物はいないだろう。たとえばペルシア人やインド人はゾウの上の木製のやぐらに配置されると、

城壁からのように、そこから投げ槍で戦う。彼らは知性と偉大な記憶力で繁栄する。群れで移動する。ネズミから逃げる。後ろ向きに交尾する。彼らは2年間妊娠している。一度しか出産せず、多くではなくただ一頭だけ子を生む。そして300年間生きる。子供を作りたくなるとパラダイスに近い東の方角へ赴き、そしてマンドラゴラと呼ばれる木のあるところへ雌のゾウと一緒にいき、雌は先に木からとり、雄に与える。それを雄が食べている間に雌は誘惑し、直ちに子をやどす。産み時が近づくと、池に入る、池の水が母親の乳房のところにくるまで。雄のゾウはお産の間見張っている、ドラゴンはゾウの敵だから。もしゾウがヘビを見つけたら、死ぬまで踏みつけて殺す。さらにゾウは雄牛に恐怖し、ネズミを恐れている。ゾウは一度倒れると起き上がることができないが、これはゾウの性質である。しかも眠るときに木に寄りかかっている倒れてしまう。というのも膝の関節をもたないからである。狩人はそこで木に切り込みをいれる、ゾウがそれに寄りかかったとたん木とともに倒れるように。倒れながら泣き叫んでいると、大きなゾウが現れるが、起き上がらせることはできず、両方のゾウが泣き叫ぶと12頭のゾウが来る、しかし倒れたゾウを起こすことはできない。結局すべてのゾウが鳴くと、すぐさま小さなゾウが来て、鼻ごと口を押し込んで、倒れたゾウを起こしてしまう。さらに小さなゾウはこんな性質をもっている、その髪の毛と骨で火を起こすと、いかなる悪しきことにもドラゴンによっても損なわれることはない。大きなゾウとその雌はアダムとエヴァを表している。というのは彼ら自身の罪を犯す以前、神を喜ばせていた時、彼らは交際することも知らなければ、罪の知識もなかったのである。妻が木から実をとって食べると、直ちに知恵の木の実を彼女の夫にわたす。すると妊娠し、その結果パラダイスから出ていくことになった。パラダイスにいた間アダムは彼女を知ることはなかった。つまりこのように記されている、アダムはその妻を知り、みごもった、そして彼女は汚れた水の上でカインを産

んだ。このことについて預言者は『主よ、わたしを救ってください。わたしの魂の高さまで水が迫ってきているのです』という。ドラゴンはおととしめ、神の聖所から追い払わせた。これは神にとって喜ばしくない。大きなゾウが来た。これは律法であり、起き上がらせることはできなかった。盗賊の手中におちた人を祭司たちが救うことがなかったように。また12頭のゾウも彼を起こすことはできなかった。彼らは預言者の一団であり、上述の傷ついた人を救わなかったレビ人のように。しかしかしこいゾウ、それは私たちの主イエス・キリストであり、彼は誰よりも偉大でありながら、すべてのもののちいさきものとされた。彼は死に至るまで身をおとし、それによって人々は高められ、かしこいサマリア人がロバに乗せたように、傷ついたその人が私たちの弱い心を持ち去り、私たちの罪を担ったのである。さらにサマリア人は保護者とみなされている。彼についてはダヴィデがこう述べている、『ちいさきものたちを守って下さる主は』、それは主がそこにおられるからであり、悪魔は近づくことができない。まさにゾウはその鼻で巻き取ったものを押しつぶす。足の下に踏みつけた物はこなごなにす。あたかも巨大な瓦礫が落ちてきて押し殺すかのように。彼らは雌をめぐって争わない。彼らは姦淫を知らないのである。彼らには慈悲深い徳がそなわっている。事実、もし、荒野をさまよっている人を見かけたら彼らの知っている道に導くだろうし、ひとかたまりになった家畜の群れに出会えば、彼らはその旅を愉快で静かなものになるようにするだろうから、鼻(または足?)が近くのを殺すこともない。もしたまたま戦闘で攻撃されることがあれば、死傷者を少なからず気遣い、そして疲れ、傷ついたものは群れの真ん中に隠す』。

波線の部分はソリヌスの『奇異事物集成』(3世紀)からの引用であり、プリニウスの『博物誌』にも同様のことが語られている。(8)

善きサマリア人の譬えをゾウの寓意として読む、キリスト教的解釈の部分はおそらく『フィシオログス』

のギリシア語原典には含まれず、ラテン語版が作られた時に付け加わった部分ではないかと思われる。『フィシオログス』のこのような解釈の部分は、たいていの場合、それぞれの動物が、キリストやキリスト教会の寓意的存在かそれとは対極にある邪悪な存在を意味する、という二元論的な解釈が行われており、教訓説話にそれほど比重はおかれていない。キリストの神性を示すヒョウ、ユニコーン、あるべき教会人をあらわすシカ、ユダヤ人に比せられるハイエナ。ゾウはイエス=キリストを暗示すると同時に、アダムとエヴァである。

「動物譜」に関する、D. Hassigの研究によれば、この他ゾウに関して、他の2写本では、ブタでゾウを驚かせるというエピソードが含まれており、他の一写本ではゾウが結婚の理想のカップルとして言及されているという。(9)

ちなみに、イングランドにおいてゾウの実物が知られる機会があったのは、少なくともロンドン塔で飼われたと記録されている1255年である。(10) 次に、教導的色彩の濃いアリの項目について見る。

## II アリ (Formica) についてのテキスト

アリについてのテキスト前半では『フィシオログス』と共通する内容が語られている。(11)

「アリは三つの性質をもっている。第一の性質は列をなして歩き、それぞれが口で穀物を運ぶことである。持たない者が、あなたの穀物を分けて下さいなどということはない、先に進む者の跡をたどり、穀物が見つかった場所まで行くと穀物をもって巣まで戻る。このことは、用心深い人の例を示している。アリのように集めておけば、将来報われることになる。第2の性質は、巣に穀物をしまい込んでしまうと、それを二つに割り、はからずも冬に雨で穀物が水浸しになって、穀物が芽をふき、飢えて死なないようにすることである。あなた方人間も、古い契約の言葉と新しい契約の言葉

を分けなさい、霊的な事と肉的な事を見分けよということである。そうすれば、言葉はあなたを殺さない、というのは律法は霊的なものであり、使徒が言うように、言葉は殺すが霊は生命を与える。ユダヤ人は文字だけに注意を払い、霊的な意味を無視しているので、飢えで殺される。第三の性質は、刈り入れ時に穀物畑を歩きまわり、口で大麦の穂か小麦の穂か見分ける。もし大麦であれば、他のところへ移動し、匂いをかぎ、小麦だと思えば、穂の上を上り、一粒とり、そして自分の巣に運ぶ。大麦は野獣のえさである、小麦の代わりに私のために大麦が生えた、とヨブが言うように。このように異端の教えは大麦であり、遠くに投げ捨てられるべきである。なぜなら人間の魂を打ち砕き、殺すからである。従ってキリスト教徒はすべての異端から逃れよ、彼らの教義は間違っており、真実の敵なのだから」。

アリについての記述で、『フィシオログス』のギリシア語テキストやラテン語版では第一の性質について、「賢き乙女と愚かな乙女」の譬え話についての言及が見られる。しかしここでは終末論的なニュアンスを持つこの譬え話への言及はない。一方、ギリシア語テキストとラテン語版双方で言及されている、第二の性質での反ユダヤの考え方や第三の性質での異端への注意は残されている。

アリについてのテキストはさらに『ヘクサエメロン』からの引用で続けられている。<sup>(12)</sup>「聖書はこう言っている、アリをよく見よ、怠け者よ、彼らの道を見習い、もっと賢くなれ。<sup>(13)</sup>というのは、耕作地を持たず、誰かに駆り立てられることもなく、主人の下で何とかして食料を集めてくるということもない。アリはあなたの働きから、収穫物をしまい込み、あなたが欲望ではちきれそうになっている時、アリは何も欲しがらない。アリにとって閉めきった穀物倉はなく、突破できない見張りもいなければ、もぐり込めない穀物の山もない、管理者は盗みを見てもとがめず、持ち主は彼の損失を考えても、仕返しをしようとはしない。戦利品は黒い

行列で、畑を運ばれていき、その道筋は旅するものの同伴者たちで沸き立っている、口ではくわえきれない大きな穀物が彼らの肩で運ばれていく。収穫物の持ち主がすっかりこれを見て、そのような懸命の働きによるつつましい蓄えをとがめるなどは赤面ものである。さらにアリは天気の良い時を探り当てる力をもっている。湿り気を帯びた蓄えが雨で湿るのに気付くと、大気の様子から注意深く調べ、都合の良い天候がいつまで続くかを見定めることができる、そして備蓄の山を崩して、その肩に載せて穴の中から運び出す。そうすれば彼らの穀物は安定した晴天の下で乾かされる。従ってアリがその収穫物をしかるべき倉庫に戻さないようなら、そんな日は終日、雲から雨が急に落ちてくるのを見ることはない」。

『語源』にもアリについての言及があるが、『語源』で語られているのは、アリが冬に備えて食料を蓄えること、エチオピアにイヌのようなアリがいて、黄金を守っていることであり、ここでは引用されていない。『ヘクサエメロン』の持つ牧歌的な気分が尊重されたのだろうか。<sup>(14)</sup>

ゾウとアリの二項目を見ただけでは『フィシオログス』を柱としてテキストが構成されているように思えてしまうが、実は必ずしもそうではない。

### Ⅲ 「ピーターバラ本」について

「ピーターバラ本」の動物譜テキストは、この写本の22 フォリオ（フォリオ 189 から 210 まで）に収められている。カンタベリー大司教のマシュー・パーカー（1575年死去）が収集した写本と見なされており、合本された他のテキストとの関連性は薄い。テキストは1頁2欄42行で書かれており、その長さは項目により異なっている。最も長いテキストを含むのはウマの項目であり、144行分のテキストから成る。短い項目の場合のテキストはわずか数行である。ちなみにゾウのテキストは86行を占め、アリのテキストは59行である。ゴ

シックのクォドラータ書体で記されている。

この写本の場合、挿絵とテキストのイニシアルと本文が一組で、それぞれの一項目を構成している。全部で104組あるが、テキスト最後の水中生物についての部分は挿絵が一点しかなく、「魚」(Piscis) でまとめられているので、扱われている動物の数は、文中に言及されている動物などとも合わせると、104をはるかに越える。<sup>(15)</sup> 3種のヘビを扱っている項目 (Serpens) の前に記述されているイモムシ類 (Vermis: ケムシ、カイコ、ウジなど) については挿絵がない。その一方で、イヌ (Canis) については3項目ある。また、ワニの場合には四足獣の1項目として扱われている一方で、魚類の項目の中で再び取り上げられており、後者のためのテキストとして『語源』からの引用部分が繰り返されている。サイレーンの場合には有翼の爬虫類として鳥類と爬虫類の扱いで2項目、前者は『フィシオログス』からの引用、後者は『語源』からの抜粋をテキストとする。

『フィシオログス』のもともとのテキストで扱われた動物は35といわれている。他言語に翻訳された場合と同様ラテン語版が作られた際、項目の数が増加しているとはいえ、当然、『フィシオログス』に言及されていないが「動物譜」に取り上げられている動物は50以上はあるということになる。また、ロバやキジバト、サラマンドラなどのように『フィシオログス』と共通の動物ではあっても、そのテキストの内容が、『フィシオログス』のテキストとは異なる項目もある。

「動物譜」のテキストにおけるキリスト教的な解釈や聖書からの引用は、ほとんどがもともと『フィシオログス』や『ヘクサエメロン』等に組み込まれていた。そしてそれが、アリのテキストで見たように、「動物譜」では引用されないということもある。

その一方、主に家畜や家禽などの身近な動物に関してはほとんど解釈が加えられていない。また、「動物譜」テキストの生成過程で、後で加わった『語源』は、もともと解釈を含まない。従って『語源』からの抜粋のみで

構成されている項目、ヤマネコやグリフィン、ヒトコブラクダなど32項目の場合は当然解釈を含まない。

本稿で取り上げたゾウとアリについてはその出典が確定できた項目のうちの2例にすぎない。しかし、テキストが何かのテキストからの引用によってのみ構成されているのか、そうでないのか、加筆があったとすれば、何が加わったのか、出典が分かるようにプリニウスやソリヌスの名前が本文中に記されている例はわずかしかない。さらに、その出典が判明しても、その生成過程を知ることは一層容易ではない。テキストの出典は項目ごとに異なっている。カラドリウスのように『フィシオログス』テキストのみを基本にしている場合、ユニコーンやキツネのように『フィシオログス』と『語源』の両方のテキストからの引用の組み合わせの場合、ポナコンのようにソリヌス（もしくはプリニウス）などからの引用のみの場合、そして『フィシオログス』や『語源』からの内容をもとに展開している場合など、項目ごとに異なっている。しかし、動物の習性、特徴を述べ、それをキリスト教的な道徳的考えと結びつけるという『フィシオログス』が示した考え方は引き継がれていると思われる。第2グループの場合には、その構成は、さらに『語源』から、その項目の配列順も含め、強い影響を受けている。

最後に、寓話が付け加わっている点で例外的なイヌの項目を簡単に紹介する。前述のように、イヌの項目は例外的に3項目にわたり、『語源』 ソリヌス、『ヘクサエメロン』からの引用を含んでいる。<sup>(16)</sup> 最初の項目は『語源』からの引用で始まり、イヌについての名前の由来が語られている。そのあとイヌには多くの種類があり、猟犬、牧羊犬、番犬がおり、さらにイヌは飼い主に忠実であると書かれている。このテキストは『語源』にはない。そしてイヌは人間を離れては暮らせないという『語源』からの記述で締めくくられている。

第2項目はその例としてプリニウスもしくはソリヌスからの引用によってガラマンテスの王の救出に200匹のイヌが関わった話、主人イアソンが殺害されて食

を絶ったイヌの話、リシマクス王の火葬の際殉死したイヌ、有罪とされた主人の処刑の後も主人の世話をしようとしたイヌの話が語られている。その後に『ヘクサエメロン』からイヌの嗅覚による追跡能力についてのテキストが引用されている。

第3項目は『ヘクサエメロン』からの引用、アンティオキアで起きた殺人事件でのイヌの働きについての記述で始まる。この引用のあとに、イヌが傷をなめて治すこと、吐いたものを食べてしまうこと、川の水に映った肉をほしがってくわえていた肉をなくしてしまうことが書かれており、これにそれぞれの解釈が続く。肉を失ったイヌは、よく分からない物を欲しがって今持っている物までもなくしてしまう愚か者、というだけでなく、貪欲でいると敵に容易に陥れられる例として語られている。飽食の中で滅びたソドムの町の名も挙がっている。最後はまた『語源』からの抜粋で、イヌとオオカミ、イヌとトラの交配種についての記述で終わる。<sup>(17)</sup>

くわえていた肉をなくしてしまうイヌの物語は、いわゆる「イソップ寓話集」でよく知られている。フェアドルスやアダマールなどによるラテン語の寓話集が中世ヨーロッパには流布していたから、様々な経路を経て、キリスト教での意味付けが加わり、「動物譜」に紛れ込んだのだろう。『語源』で始まり、『語源』で終わるイヌの項目の構成は、『語源』からの引用で始まり(12.2.1)、『語源』からの引用(12.6.63)で終わる「ピーターバラ本」の「動物譜」全体の構成といわば同じである。

第2グループのテキストの内、この「ピーターバラ本」のテキストに最も近いのがケンブリッジ写本(University Library Ms li 4.26 1200-10年頃)と言われている。少なくともアリとゾウのテキストについては、1210年頃のオックスフォード本(Ashmole 1511)<sup>(18)</sup>や1200年頃のアバディーン本(MS.24)とほぼ一致することが確認できた。ピーターバラ本の制作時期よりもはるか以前にすでにゾウとアリのテキストはこ

の形にまとめられていたことになる。

## 終りに

以上みてきたように「動物譜」のようなテキストは、J・アメスの言葉を借りれば「諸テキストの格納庫のごとき役割しか果たしておらず」、何のために多数作られたのかという疑問に結びつくだろう。それは、少なくとも12世紀が読書に関する大変革期であって、書物についての需要と供給の関係が崩れ、「動物譜」に限らず、様々な分野の引用文集や詞華集が増加し始めた時期であったということ無関係ではないだろう。また、イシドルスやアンブロシウスなどの定評ある古い文献からの引用集は、異端論争が激しさを増すこの時期、安全なテキストだったに違いない。<sup>(19)</sup>

## 註

1. ラテン語のテキストはL. F. Sandler, *The Peterborough Bestiary MS 53(fol.189-210v) College of Corpus Christi and the Blessed Virgin Mary, Cambridge*, Commentary part i (Luzern, 2003)に基づく。英訳と独訳が並記されている。写本についてはpart iiを参照。
2. op. cit., pp. 47-51. “Est animal quod dicitur elephas, in quo non est concupiscencia coitus. Elephantem greci a magnitudine corporis vocatum putant, quod formam montis perferat. Grece enim mons eliphio dicitur. Apud indos autem a voce barro vocatur, unde et vox eius barritus est, et dentes ebur. Rostrum autem promuscida dicitur, quoniam illo pabula ori admovet, et est angui similis, vallo munitur eburneo. Nullum animal grandius videtur. In eis enim perse et indi ligneis turribus collocati, tanquam de muro iaculis dimicant. Intellectu et memoria multa vigent. Gregatim incedunt. Murem fugiunt. Aversi coeunt. Biennio autem parturiunt, nec amplius quam semel gignunt, nec plures sed tantum unum. Vivunt autem annos trescentos. Si autem voluerit facere filios, vadit ad orientem prope paradysum, et est ibi arbor que vocatur mandragora, et vadit cum femina sua que prius accipit de arbore et dat masculo suo, et seducit eum donec manducet, statimque in utero concipit. Cum vero tempus pariendi venerit, exit in stagnum, et aqua venit usque ad ubera matris. Elephas autem custodit eam

parturientem, quia draco est inimicus elephanti. Si autem invenerit serpentem, occidit eum, quem conculcat donec moriatur. Est autem formidabilis tauris elephas, tamen murem timet. Hec est natura eius, si ceciderit non potest surgere. Cadit autem cum se inclinatur ad arborem ut dormiat. Non enim habet iuncturas geniculorum. Venator autem incidit arborem modicum, ut elephas cum se inclinaverit similiter cum arbore cadat. Cadens autem clamat fortiter, et statim magnus elephas exit et non potest eum levare, tunc clamant ambo, et veniunt xii elephantes, et non possunt eum levare qui cecidit. Denique clamant omnes et statim venit pusillus elephas et mittit os suum cum promuscida, et elevat eum. Habet autem pusillus elephas hanc naturam, ubi incensum fuerit de capillis et ossibus eius neque aliquid mali accidit neque draco. *Spiritualiter*. Magnus elephas et femina eius, personas significant adam et eve. Cum enim carne essent placentes deo ante ipsorum prevaricationem, non sciebant coitum neque intelligenciam peccati habebant. Quando autem mulier manducavit de ligno, tunc intelligibilem mandragoram dedit viro suo. Deinde pregnans facta propter quod exivit de paradiso. Quamdiu enim fuerunt in paradiso, non cognovit eam adam. Scriptum est enim, Cognovit adam uxorem suam, et concipiens peperit chaym super vituperabiles aquas. De quibus ait propheta, Salvum me fac deus quoniam intraverunt aque usque ad animam meam. Et statim draco subvertit eos, et alienos fecit ab arce sua. Hoc est non placere deo. Tunc venit magnus elephas. Hoc est lex, et non eum levavit, quomodo nec sacerdos eum qui incidit in latrones. Nec xii elephantes levaverunt eum, id est choro prophetarum sicut nec levita illum vulneratum quem diximus. Sed intelligibilis elephas, id est dominus noster ihesus xpistus cum omnibus maior sit omnium pusillus factus est, quia humiliavit se factus obediens usque ad mortem ut hominem elevaret, intelligibilis samaritanus qui imposuit super iumentum, ipse enim vulneratus tulit infirmitates nostras et peccata nostra portavit. Interpretatur autem samaritanus custos, de quo david dicit, Custodiens parvulos dominus, ubi autem est dominus presens, diabolus appropinquare non poterit. Elefantes vero quicquid promuscida sua involverint frangunt. Pede vero quicquid compresserint, velud quodam lapsu ruine ingentis exanimant. Propter feminas numquam dimicant, nulla enim noverunt adulteria. Inest illis clemencie bonum. Quippe si per deserta vagabundum hominem forte viderint, ductus usque ad notas vias prebent, vel si consertis pecoribus occurrerint, itinera sibi blanda et placida manu faciunt, ne qua tela obivium animal interimant. Conflictis fortuito si quando inpugnantur, non mediocre curam sauciorum. Nam fessos vulneratosque in medium receptant.”

3. 「詩篇」68の2 (69の2)

4. 「詩篇」114の6 (116の6)

5. 『動物譜』の典拠については、L. F. Sandler, op. cit. part ii 参照。cf. M. R. James, *The Bestiary* (Oxford, 1928) pp. 28-34. 『フィシオログス』のラテン語版については Carmody の校訂本 versio B と versio Y が知られている。F. J. Carmody, ed., *Physiologus latinus, éditions préliminaires, versio B* (Paris, 1939), F. J. Carmody, ed., *Physiologus latinus versio Y* (Berkeley, 1944), Carmody に基づく英訳本としては M. J. Curley, trans., *Physiologus* (Austin, 1979) がある。また、ギリシア語版のドイツ語訳からの邦訳がある。オットー・ゼール『フィシオログス』博品社、1994年、イシドルスの『語源』に関しては W. M. Lindsay, ed., *Isidore of Seville. Etymologiarum, sive originum*, 2 vols. (Oxford, 1911 rpt. 1990) を参照。リンゼイの校訂本に基づく英訳が最近出版された。S. A. Barney, W. J. Lewis, J. A. Beach, O. Berghof, trans., *The Etymologies of Isidore of Seville* (New York, 2006) ソリヌスの校訂本としては、T. Mommsen, ed., *C. Iulius Solinus, Collectanea rerum memorabilium* (Berlin 1864 第2版1895, その再版1958) がある。英訳としては現在のところ、A. Golding, *Solinus. The Excellent and Pleasant Works of Julius Solinus Polyhistor* (London, 1587 rpt. 1979) がある。ソリヌスの記述のほとんどはプリニウスの『博物誌』に基づくと言われている。プリニウスについては『プリニウスの博物誌』雄山閣、1986年、全3巻を参照。『ヘクサエメロン』については J. J. Savage, trans., *Saint Ambrose; Hexameron, Paradise, and Cain and Abel* (New York 1961 rpt. 1977) と Ambrose. *Hexameron*, Migne, *Patrologia latina* 14 (Paris, 1844), cols. 133-288 を参照。写本によっては、ギラルドゥス・カンブレンシスの『アイルランド地誌』や、フィエルトのフーゴーなどのテキストからの引用も含んでいる。
6. 現存する写本とその分類は、M・R・ジェイムズの分類 (M. R. James, op. cit.) が出発点となって、現在に至るまで見直しや再検討が続けられている。M・R・ジェイムズは41点の写本を調査し、4グループに分類。第2グループに分類した写本の数は25。分類については F. Klingender, *Animals in Art and Thought* (Cambridge, Massachusetts, 1971) pp. 340ff. に簡単にまとめられている。以後の分類については W. B. Clark and M. T. McMunn eds., *Beast and Birds of the Middle Ages* (Philadelphia 1989) pp. 197-203. 第2グループの写本は33点に増加。ラテン語以外の写本についてもまとめられている。この他、R. Baxter, *Bestiaries and their Users in the Middle Ages* (Stroud, 1998), pp. 82-143 を参照。
7. 『フィシオログス』のゾウに関するテキストは versio Y に近い。Carmody B, chap. 33, pp. 57-58, Carmody Y, chap. 20, pp. 117-119, Curley, pp. 29-32, ゼール, pp. 129-133, 『語源』12.2.14-16『ヘクサエメロン』6.6 (37)、6.5 (35) Savage, pp. 249-50. Migne, *P. L.* 14, cols. 268-271.
8. プリニウス, 8.9, 13, 23, (pp. 345-350). ソリヌス, T. Mommsen 25, 1-7, pp. 111-2. Golding 37.
9. D. Hassig, *Medieval Bestiaries, Text, Image, Ideology* (Cambridge,

1995), pp.129-144. ゴウの他、論じられている項目は以下の通り。イタチ、シカ、ミツバチ、キツネ、フェニックス、ビーバー、ヤツガシラ、サイレン、火打ち石、ハイエナ、パンサー。

10. G. C. Druce, *The Elephant in Medieval Legend and Art*, *Archaeological Journal* 76 (1919) pp.1-73.
11. Sandler, op.cit., pp.95-98. 『フィシオログス』の内容と共通する部分。(Carmody Y 14, pp.112-113. Carmody B11, pp.22-25. Curley, pp.20-23., cf. ゼール, pp.35-40.) “Formica tres naturas habet. Prima natura est, ut ordinate ambulet et unaqueque earum grana baiulet in ore suo, et hee que vacue sunt non dicunt, Date nobis de granis vestris, sed vadunt per vestigia priorum usque ad locum ubi frumentum inveniunt, et afferunt frumentum in cubile suum. *Spiritualiter*. [H]Aec ad prudentium significacionem dicta sufficiant, quia sicut formica, ita congregant unde remunerentur in futuro. Secunda natura est, quando recondit grana in cubile suum, dividit ea in duo, ne forte pluvia infundantur in hieme et germinent grana, et fama sic pereat. *Spiritualiter*. Sic et tu homo verba veteris et novi testamenti divide, id est discerne inter spiritualia et carnalia, ne littera te occidat, quoniam lex spiritualis est, sicut ait apostolus, littera enim occidit, spiritus autem vivificat. Iudei namque solam litteram attendentes et spiritualem intellectum contempnentes, fame necati sunt. Tercia natura est, tempore messis ambulat inter segetes et ore cognoscit an ordei sit spica an tritici. Si fuerit order, transit ad aliam spicam, et odorat et si senserit quia tritici est, ascendit in summitatem spice et tollens inde granum portat in habitaculum suum. Ordeum enim brutorum animalium est cibus, unde dicit iob pro tritico produit michi ordeum. *Spiritualiter*. Sic doctrine hereticorum ordeacee sunt et procul abiende, que disrumpunt et interficiunt animas hominum. Fuge ergo xpistiane omnes hereticos quorum dogmata falsa et inimica sunt veritati.”
12. 『ヘクサエメロン』 6.4.16 からの引用部分。“Dicit enim scriptura, Confer te ad formicam o piger, emulare vias eius et esto illa sapiencior. Illa enim nullam culturam possidet, neque enim qui se cogat habet, neque sub domino agit quemadmodum preparat escam. Que de tuis laboribus si messem recondit et cum tu plerumque egeas, illa non indiget. Nulla sunt ei clausa horrea, nulle inpenetrabiles custodie, nulli inviolabiles acervi, spectat custos furta que prohibere audeat, aspicit sua dampna possessor, nec vindicat. Nigro convectatur agmine preda per campos fervent semite comitatu viancium, et que comprehendi angusto ore non possunt, humeris grandia frumenta traduntur. Spectat hec dominus messis et erubescit tam parca pie industrie negare compendia.” 以下6.4.20からの引用 “Novit etiam formica explorare serenitatis tempora. Nam cum adverterit madidatos ymbre fructus suos humescere, explorato diligencius aere

quando iugem posset servare temperiem, acervos reserat suos, et de cavernis foras suis humeris exportat, ut iugi sole propria frumenta siccentur. Denique aut numquam illis diebus omnibus rumpi de nubibus ymbres videbis, cum fruges suas horreis propriis formica recondit.” Cf. Migne, *P. L.* cols. 262-264., Savage, pp.235-238.

13. 『箴言』 6.6
14. R. Barber, intro. and trans., *Bestiary; being an English Version of the Bodleian Library, Oxford, MS 764* (Woodbridge, 1999) p. 114. 『語源』 12.3.9 からの引用。この MS 764 番号本ではアリの項目はこの『語源』からの引用で始まっている。
15. L. F. Sandler, *Gothic Manuscripts 1285-1385, A Survey of Manuscripts Illuminated in the British Isles*, vol. 5, (Oxford 1986), pp. 29-30. no.23. L. F. Sandler (2003), pp.72-77.
16. イヌの第1項目

“Canis nomen latinum, grecam ethimologiam habere videntur. Greco enim cenos dicitur, licet quidem a canore latratu appellatum existiment, eo quod insonat, unde et canere dicitur. Nichil autem sagacius canibus. Plus enim sensus ceteris animalibus habent. Nam soli sua nomina recognoscunt. Dominos suos diligunt.” 下線部分『語源』 12.2.25-26 からの抜粋。“Canum sunt plurima genera. Alii ad capiendum investigant feras silvarum. Alii ab infestacionibus luporum vigilando greges custodiunt ovium. Alii custodes domorum substanciam dominorum suorum custodiunt, ne forte rapiantur in nocte a latronibus. Etiam pro dominis suis se morti obiciunt. Voluntarie ad predam cum domino currunt. Corpus domini sui etiam mortuum custodiunt et non linquunt. Quorum extremo natura est extra homines esse non posse.” 下線部分『語源』 12.2.26 からの抜粋。

#### 第2項目

“Legitur canes in tantum suos diligere dominos, ut garrantem regem ab inimicis captum ac in custodia mancipatum, ducenti canes agmine facto per medias acies inimicorum ab exilio reduxerunt preliantes adversus resistentes. Jasono licio interfecto, canis ipsius aspernatus cibum inedia obiit. Lisimachi regis canis flamme se iniecit, accenso rogo domini sui, et pariter igni absumptus est. Alpio iunio pictinio consulibus dampnatum dominum canis est abigi non posset comitatus in carcerem mox percussus ululatu prosecutus est. Cumque ex miseracione populi romani potestas ei cibi fieret, ad os defuncti escam tulit. Ultimo inde deiectum in tyberim cadaver, adnatans sustentare conatus est. Canis vero ubi vestigium leporis cervine reppererit, atque ad diverticulum semite venerit, et quoddam viarum compitum quod partes in plurimas scinditur obiciens singularum semitarum exordia, tacitus secum ipse pertractat, velut sillogisticam vocem sagacitatem colligendi odoris emittens, aut in hanc partem inquit deflexit, aut in illam, aut certe in hunc se amfractum contulit, sed”

nec in istam nec in illam ingressus est, superest igitur ut in istam se partem contulerit, et sic falsitate repudiata, invenit veritatem.”  
波線部分ブリニウス 8.142,143,145,pp. 373-374. ソリヌス, T. Mommsen 15, 8-11, pp.83-84. Golding 24、点線部分『ヘクサエメロン』4.23, Migne, col. 266, Savage, p.242.

### 第3項目

“Sepe eciam necis illate evidencia, canes ad redarguendos reos indicia prodiderunt, ut muto eorum testimonio plerumque sit ceditum. [A]ntiochie ferunt in remociore parte urbis quandam crepusculo necatum virum, qui canem sibi adiunctum haberet. Miles quidam predandi studio minister extiterat cedis. Tecto domino, tenebroso adhuc diei exordio, canis in alias partes secesserat, et iacebat inhumatum cadaver. Sed cum frequens convenisset spectantium vulgus, astabat et canis, et questu lacrimabili, domini sui deflebat erumpnam. Forte is qui necem intulerat ut se habet versucia humani ingenii conversandi ibi modi auctoritate presumpta, ut sic fidem ascisceret innocencie, ad illam circumstantis populi accessit coronam, et velut miserans appropinquavit ad funus. Tunc canis sequestrato paulisper questu doloris, arma ulcionis assumpsit atque apprehensum tenuit, et velut epylogo quodam miserabile carmen immurmurans, universos convertit in lacrimas, fidemque probacioni detulit, quod illum solum tenuit ex plurimis, nec dimisit. Denique perturbatus ille ob manifestum rei indicium, neque odii neque inimiciarum neque invidie aut iniurie alicuius poterat obieccionem vacuare, crimenuque diucius nequivit refellere. Itaque quod erat difficilium, ulcionem perpessus est, quia defensionem sibi prestare non potuit. Lingua canis dum lingit vulnus, sanat illud. Victus eius admodum modicus esse fertur. Catuli denique lingua vulneratorum solet esse saluti intestinorum. Natura eius est, ut ad vomitum suum revertatur iterumque comedat. Cumque fluvium transnataverit, carnem vel aliquid tale in ore tenens, cum viderit umbram os suum aperit, atque dum properat aliam carnem assumere, ipsam quam tenet perdit. Cuius figuram in quibusdam rebus predatores habent, qui semper ammonendo atque exercendo que recta sunt, insidias diaboli propellunt ne thesaurum dei, id est animas xpistianorum rapiendo ipse auferat. Lingua canis dum lingit vulnus curat, quia peccatorum vulnera cum in confessione nudantur, sacerdotum correptione mundantur. [I]ntestina quoque hominis curat lingua catuli, quia secreta cordis sepe mundantur opere et sermone doctoris. Modicus admodum victus canis dicitur esse, quia qui preest aliis, sapiencie studiis invigilat, crapulamque omnibus modis vitare debet. Nam in securitate panis sodoma perit. Nullo demum aditu tam cito possidet inimicus hominem, quam voraci gula. Quod canis ad vomitum redeat, significat quosdam post peractam confessionem incaute ad perpetrata facinora redire. Quod carnem in flumine propter

concupitam umbram relinquit, significat stultos homines propter ambitionem ignote rei id sepe quod proprii iuris est relinquere, unde fit ut dum non valent adipisci id quod cupiunt, perdere frustra norunt id quod reliquerunt. Licisci dicuntur canes qui ex lupis et canibus nascuntur, cum inter se forte miscentur. Solent et inde femine canes noctu in silvis alligate admitti ad tygres bestias. A quibus dicuntur nasci et ex eodem fetu canes acerrimi, et adeo fortes, ut complexu leones prosternant.”点線部分『ヘクサエメロン』4.23-24, Migne, col. 266, Savage, p.242. 下線部分『語源』12.2.28. イヌについてのほぼ同じテキストがいわゆるDe bestiis et aliis rebusの第3書にある(Migne, P. L. 177. cols. 86-88)。しかしこのテキストについてはよく分かっていない。cf. F. McCulloch, *Medieval Latin and French Bestiaries* (Chapel Hill, 1960), pp.30-38, 他。

17. 『イソップ寓話集』岩波書店 1999年 114-5頁。「動物譜」では、口に肉片をくわえたイヌが泳いで川を渡るtransnatoことになっている。
18. Cambridge (University Library MS li 4 26)本の英訳本、以下を参照。T.H. White, ed. and trans., *The Book of Beasts, being a Translation from a Latin Bestiary of the Twelfth Century* (New York 1954), Ashmole 1511 番写本については、F. Unterkircher, *Bestiarium, Die Texte der Handschrift MS Ashmole 1511 der Bodleian Library Oxford in lateinischer und deutscher Sprache* (Graz, 1986), ゾウのテキストはfolio 16r.-17r. (pp. 34-37)、アリのテキストはfolio 36v.-37r. (pp. 70-72)、アバディーン本ではゾウのテキストの冒頭部分を含んでいたと思われる紙葉が欠けている。ゾウのテキストはfolio 10r.-11r. アリのテキストはfolio 24v.-25r. アバディーン本はデジタル化され、公開されている。
19. 以前から「動物譜」を説教の種本に使っていたのではないかという推測がされてきたが、これを疑問視する意見もある。W. B. Clark, *Twelfth and Thirteenth Century Latin Sermons and Latin Bestiary, Compar(a)ison 1*, 1996 pp.5-19, J・アメス「スコラ学時代の読書形式」、R・シャルティエ、G・カヴァッロ『読むことの歴史』大修館書店 2000年、135-156頁。

### 〈付記〉

本稿は平成17-8年度塚本学院研究補助費による研究成果の一部である。